

5 動物介在活動とのかかわりについて — 獣医師から

現在では、人間社会の中にさまざまな形で動物達が入り込んできています。もちろんみなさまもご承知のような、盲導犬、警察犬、災害救助犬など特殊技能を身につけた動物達もさることながら、各家庭でも手軽に動物が飼えるようになり、多くの家庭で動物を飼育しているのが目立ってきています。しかも、最近の高度情報化社会のおかげで、より正確な医学情報や飼育管理に関してのアドバイスや、躰、問題行動についての適切な指導が得られるようになり、各家庭における地位の向上につながっていると思います。特に犬、猫においては、人間との間に太い絆で結ばれたすばらしい動物達が増えてきました。このような動物達を連れて、老人施設を始めとする各施設にふれあい活動を行う動物介在活動(AAA)が、日本動物病院福祉協会のCAP活動を草分けに日本各地で行われるようになりました。

このような動物介在活動(AAA)とは、主にボランティア活動として行われることが多く、医療の専門家が医療活動として行う動物介在医療(AAT)とは異なります。ここ白朋苑では、三年前より、訪問活動が始まりました。この活動の特色は、保健所という行政の主導で、ボランティアおよびボランティア動物、獣医師、施設の職員が協力し合って活動しているところです。四年前、横浜市南区保健所衛生課より動物を介して社会福祉や、ボランティア活動などをやってみたく

の提案が南区獣医師会に出され、この動物介在活動を紹介しました。

私達の行っているこの、「人と動物とのふれあい事業」は、行政、南区獣医師会、ボランティアの三つの柱で支えられています。ここに、施設職員の理解と協力でスムーズな活動が実現します。ボランティアの募集は、ボランティア動物の募集から始まります。ここで大切なことは、その動物がボランティア動物に適しているかどうかを見極めることです。「人が好き、触られるのはもつと大好き」という動物達を見つけるのは獣医師の得意とするところでしょう。このような動物達の適性をチェックするということは、活動を安全に衛生的に行う上で必要不可欠の出来不出来ものであります。ボランティア動物は、健康診断を毎年行い、各種予防接種や血液検査がなされているかどうか、からだの各所の手入れが十分になされているかどうかチェックされ、健康であることを証明されます。さらに、適性検査として、見知らぬ人に触れてもらったり、人ごみの中を歩いたり、見知らぬ動物と会わせても平静でいられるかどうかもチェックされます。また、犬では躰として最低限必要な「すわれ」「ふせ」「まて」「おいで」がしっかりとできなければなりません。

このような健康検査、適性検査をすることで初めて安全で衛生的な動物介在活動ができるものと思います。また、活動現場でボランティア動物の当日の健康状態のチェックと、活動中の動物達の精神状態を観察することも私達獣医師に要求されることであります。活動中にボランティア動物の発するストレスサ

インを見逃さず、精神的に不安定になつてきたりしたら速やかに活動の輪から外れることを指示します。さらには、ボランティアから健康相談や躰相談を受けたたり勉強会を開いたりすることで、ボランティア同士の親睦の一助になっているかと思えます。

このように獣医師は、ボランティア動物の健康面、精神面からサポートすることによってこの動物介在活動を支援しています。このことは、獣医師が医療という仕事のほかにできる社会貢献のひとつだと思います。今後ますますこの動物介在活動が盛んになっていくと思いますが、われわれ獣医師も含めボランティアにはより責任ある行動が望まれてきます。また、このような行政主導の動物介在活動は各区単位で始まりつつあります。老人施設のみならず小学校、中学校にもこのようなすばらしい動物達を連れてふれあい活動、さわりかた教室などができるよう働きかけていきたいと思えます。このようなボランティア活動を通して多くの人に動物の温かさや思いやりの気持ちを広め、動物の素晴らしさ偉大さを広めていければと思っています。

6 結び

世間では、動物の虐待等もありますが、三年間の実践のなかで感じられることは、開始当初からボランティアの皆さんがいかに動物を愛し、我が子のように躰け、可愛がっておられるかです。ただ可愛がることはだれにでもできますが、他人や他の動物に対しても仲間として向き合えるように訓練して利用者に

写真—4 生き生きされているOさん



写真—5 反省会



触れ合わせてくれる努力だと思います。また、
三十分の短い時間内に利用者といかにコミュニ
ケーションを図ろうかと努力をしておられ
ることに感謝すると同時に、何といっても動
物達に対する感謝の気持ちが大であります。
施設は、生活歴や環境の異なった人、また、
自立している人、麻痺のある人、痴呆のある
人、寝たきりの人等、自立度の異なった利用
者の集団です。その中でひとつの訪問活動を
実践していくには、行政、獣医師、ボランテ
ィアの協力があることはもちろん、参加者と
動物達のパートナーとしてつきあおうとする

同一レベルの関係が必要であると私は考えま
す。

職員も初めは手探りでありましたが関心を
持つようになり、今後利用者とボランティア
の橋渡しになるよう協力しあい、人と動物の
ふれあいが継続していくように、また利用者
が生き生きと生活していく一つの手段とし
て支援していきたいと考えています。

△阿部〓特別養護老人ホーム白朋苑施設課
長／荒牧〓人と動物のふれあいクラブぬくぬ
く代表／加藤〓南区獣医師会・獣医師▽

写真一6 獣医師加藤氏を囲んで



写真一7 ボランティア「ぬくぬく」の皆さん

